

かゑらじと かねて思へハ 梓弓
なき数に入る 名をぞとどむる
四條畷に散った若き武将、楠正行

楠正行通信 第10号

平成27年5月12日

発行＝四條畷楠正行の会

〒575-0021 四條畷市南野5丁目2番16号

四條畷市立教育文化センター内 072-878-0020

正成、正行に四恩の教えを説いた龍覚坊

人に仕える一本に貫く道は、誠心にあり

忠魂と師魂 大楠公と恩師龍覚坊

楠正成、正行の師と言われる龍覚坊(ろうかくぼう・りゅうかくぼう)は、観心寺(河内長野市)の中院で、楠親子に四書五経、宋学等を教えたといわれる。

では、龍覚坊とはどのような人物であったのか。

昭和18年、日向書房発行「忠魂と師魂 大楠公と恩師龍覚坊」久留島武彦著が詳しい。

同書によると、龍覚坊は北条一族に滅ぼされた和田義盛の後裔に当たる人物で、和田朝正と名乗っていたようだが、楠一族との浅からぬ因縁を感じる。

源頼朝に仕えた和田義盛は、その功によって侍所の別当にまで上るが、一代の政略家北条義時の仕掛ける罠にかかって追い落とされ、人知れず鎌倉を落ち延び、飛騨の国、滝村に入り再起を期すことになる。

そして、義盛から数えて4代目の第4子が和田朝正で、北条執権への恨みを晴らすべく遍照寺に入った後、時を経て京都に修行に出、泉涌寺で修行中に、祐学改め龍学と名乗った。

そして、河内国観心寺に遊び、同寺が歴朝の勅願所であることや葛城の雄大な山系を背景として水清らかな土地に離れがたい親しみを覚え、ついに中院院主におさまった、とある。

高野山真言宗遺跡本山 観心寺

そして、龍覚坊の教えについては、観心寺発行の「高野山真言宗遺跡本山 観心寺」の中の「楠木正成と観心寺」の項で、永島龍弘現名誉住職は、

正成公の人間性について三点にまとめられているが、その一つとして『少年期を当寺で過ごして、師の龍覚より“四恩(国・親・衆生・三宝の恩)”の教えの大切さを学んだことが後年、彼の行動の基盤になっている。寺



(龍覚坊影像)

院を建立し、写経を行い、味方だけでなく敵方の供養塔も建立した幅広い人物であったといえる。』と、記されている。

父母・国王・衆生・三宝の恩

では、正成、正行に大きな影響を与えた龍覚坊の教えの中の四恩の教えとは、どのような教えだったのか。

広辞苑によると、四恩とは、仏教用語で、「衆生がこの世で受ける四種の恩。心地観経によると父母・国王・衆生・三宝の恩をいう。」とある。

恩を知り恩に報いる生き方が人たる生き方であり、父母の恩、国の恩、衆生すなわち一切の生きとし生けるものすべての恩、そして三宝すなわち仏と法と僧の恩、これら4つの恩を説いており、この教えは、今の時代にも大きな輝きを放っているのではないだろうか。注：龍覚坊影像是、「忠魂と師魂 大楠公と恩師龍覚坊」からの転載です。

菊水紋について

菊水が楠木家の家紋であることは「通信8号」に掲載した。4月例会に、会員の真木さんが家紋に関する以下の本を持参された。

- * 「家紋 千五百種的美と歴史」丹羽基二著
- * 「改訂版 平安紋鑑」京都紋章工芸協同組合刊
- * 「紋様の事典」岡登貞治編

「家紋 千五百種的美と歴史」に菊水家紋の詳細な解説が載っているので紹介する。

菊水紋

菊花と流水との取り合わせで、菊紋の一種である。

菊紋の項で述べたように中国・南陽の甘谷から流出する水が、菊の滋液をふくんで、長寿の妙薬であるという故事から案出されたデザインである。めでたい紋である。

「太平記」三・俊基朝臣東下りの条にも、同様の故事が引用してあるところを見ると、この話は鎌倉時代から南北朝の頃には、かなりひろまって伝わっていたものであろう。

衣服調度の文様としても流行し、古瓦、太刀などにも見られる。これらの文紋は、やがて家紋として使われるようになったが、その代表的一門が楠木氏である。「楠木氏系図」にはその家紋について次のように説いてある。

「主上は菊花ひとふさをとって盃に浮かべ、『菊は千年の功がある。』と申して正成に賜った。これより菊水の家紋と旗ができたのである」と。

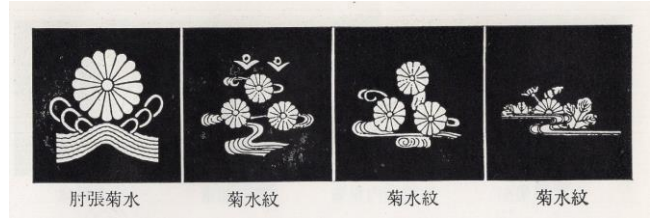
もっとも、江戸時代の学者・新井白蛾は「楠木氏の祖・橘諸兄が井出の玉川に浮かんだ山吹を後世子孫が菊水に代えてしまったのだ」と反駁している（牛馬問）。

菊水紋がはじめて史書に見えるのは「太平記」三・後醍醐天皇御没落笠置条である。「楠七郎、和田五郎は、まっしぐらに山を駆けおりと、三百余騎を二手にわけ、東西の山陰より菊水の旗二本を松風に吹きなびかせて・・・」と出ている。

「見聞諸家紋」には菊水紋は楠木氏のほかに和田氏、小芋（おくも）氏が使用していたことを述べているが、二氏とも楠木氏の同族とみられる。その他、一門に和田、橋本、甲斐庄がある。なお、江戸の初期、楠氏の後裔と称する兵学者、由井正雪なる人物が菊水の旗をおし立ててクー・デター

を断行しようとして失敗した「慶安の変」は当時の江戸っ子を驚かした。

菊水紋は、菊花三輪と流水が基本的パターンであったが、のち花の数をへらし一輪となってしまった。その他菊水に遠雁をアレンジしたものもある。（扇谷転載）

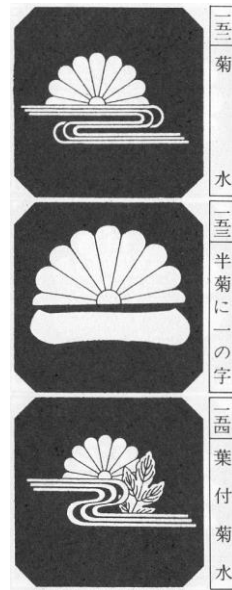


肘張菊水

菊水紋

菊水紋

菊水紋



↑ 「家紋 千五百種的美と歴史」に掲載されている菊水紋から

← 「改訂版 平安紋鑑」に掲載されている菊水紋から

橘氏のふるさと井手

転載した解説記事の中で、楠木氏の祖・橘諸兄が井出の玉川に浮かんだ山吹を、後世子孫が菊水に代えてしまった、と紹介されている。

この事について、井手町発行「橘氏のふるさと 井手」でも触れられているので紹介する。

橘神社の祭神は諸兄と正成

諸兄は、木津川を眼下に望む風光明媚な井出の高台に館を構え、氏寺として井出寺を建立するなど、井出の里を橘氏一族の本拠地としました。

風流人であった諸兄は、玉川堤を中心に山吹を植え、川面を黄金色に染める情景を楽しんだといわれています。

力を弱めた橘氏は、中央政界から去るものの地方の豪族として活躍し、その一族に楠木正成がいます。

正成の有名な「菊水の紋」は、橘氏のふるさとの玉川を流れる山吹を描いたもので、本来は「流れ山吹」であったとも言われています。

町内の玉津岡神社境内には、橘諸兄と楠正成を祭神として祀る橘神社があります。（扇谷転載）

（文責「四條畷楠正行の会」代表 扇谷昭）